

ディスコの出入口でダンス・マラソンのポスターを見つけ、優勝したらサイパンに行けるとわかつたとき、浩一は即座に参加することに決めた。サイパンは浩一の祖父つまり母の父親が戦死した島なのである。といつても祖父の靈を弔うといった殊勝な気持からではなく、母のなかにある祖父のイメージをぶち壊したいためなのだ。どうやつたら壊れるか浩一自身にもわからないが、行けば何かあるんじやないかと彼は思った。行つてやろうじやないかという気持だった。

浩一は一緒に来ていた悟や由美、それに悟の彼女に声をかけた。三人ともすぐに、おもしろそうと承知したが、誰も本気で優勝しようなんて思っていないのは明らかだつた。ここでおれが本気だといつたら、どうなるか。ウツソーと言われるのが、おちである。

次の日の日曜日、浩一は目が覚めてもベッドから起きずに、そのことを考へていた。そして本気に徹することに決めた。大会までにはまだ一カ月半もある。まず体力を鍛えることが先決だ。浩一は一年前まで高校でバレーボールをやつていたから、体力には自信があった。自信があつたから、本気になつたともいえる。

問題は相手だつた。ポスターのマラソン規定という欄には、男女がペア一になつてジルバを踊ること、という一文があつた。由美を相手に選んだのでは、勝目がないに決まつてゐる。かといつて、他に適当な相手も浮かんでこない。

浩一はまずトレーニングをすることに決め、ベッドから飛び起きると、洋服だんすの一番下の引出しから、選手時代のユニフォームを取り出した。ユニフォームといつても、ショートパンツにシャツという姿だ。三月中頃でちよつと肌寒いので、そのうえにトレーナーを着た。洗面所で顔を洗い、台所へいつて牛乳を飲んだ。居間のソファーアに投げ出されているバッグを

見て、おふくろ、帰っているのかと浩一は思った。彼が昨夜ディスコから帰ってきたのが午前一時過ぎで、寝たのが二時だったが、母の帰ってきたのは全く知らなかつた。昼も近いのに、まだ起き出してこないところをみると、朝帰りかもしれないなど浩一は思つた。

浩一の母はキヤバレーでホステスをやつてゐる。二十六歳のときに、三つになる浩一をつれて離婚し、それから弁護士事務所や印刷会社の事務や、スーパー・マーケットのパートの仕事をして、三十五歳を過ぎて、ホステス募集の広告に応募したのだ。夢の中に父つまり浩一の祖父が現れて、浩一を大学までやるよう言い、キヤバレーに勤めなさいと指示してくれたという。おじいさんはどんな顔だつたと浩一がきくと、軍服姿の髭をはやした立派な顔だつたと母は答えた。それは唯一残つてゐる祖父の写真の顔だつた。母が二歳のとき、父親は戦場にいつてしまつたから、顔を覚えているはずがないのだ。浩一はちよつといじわるく、おじいさん、キヤバレーなんて知つてゐのかなとつぶやいてみたが、おじいさんはね、いつもあの世から私たちのことを見守つてゐるから、何でも知つてゐるのよと軽くいなされてしまった。

母が離婚したのは、浩一の父が飲んだくれで、ばくち好きだつたせいだと母は浩一に説明したが、浩一は作り話じやないかと思つてゐた。離婚の原因は祖父にあるんじやないかと漠然と思つていた。つまり母のなかにある祖父と父を比べて、その落差にがくぜんとなつて……。高校生になつてから、浩一はそんなふうに考へるようになつた。

バスケットシューズをはいて表に飛び出し、堤防に向かつて十分ほど走ると息が切れてきた。浩一は体力が落ちてしまつたことに驚いた。バレーボをやつていたころは三十分走つても何ともなかつたのに。浩一の仕事はある出版会社の出庫係で、伝票を見ながら国語や数学などの参考書や問題集を揃えるのだが、百冊二百冊を一度に運ぶので足腰の鍛練になつてゐたが、スタミナの維持にはなつていなかつたわけだ。

こんなことじや、とても優勝はおぼつかないと、浩一はいささかがつかりした。それに、たとえ自分が鍛えたとしても、相手の女の子の体力も同等に追い付かなければ、やはり優勝は望めない。諦めるかと浩一は思つ

た。こんなふうに、一度やろうと決めたことを簡単に放棄すると、おふくろなら、あんたのおじいさんはね、サイパンで飲まず食わずでふらふらになりながらも、日本のために戦つて死んだのよ、それがなんですか、と見当違ひなことを言つて説教するだろうが、あいにくおふくろは何も知らない。浩一があくまで大学にいかないことを押しとおせたのも、一度も大学にいきたいと言わなかつたからだ。浩一は勉強が嫌いだつたし、何よりも母に面倒を見てもらうことにうんざりしていたのだった。

浩一はいかにも走りますという恰好をしてきたので、歩いてばかりいるのも居心地悪く、他に走つている連中につられるように堤防の上を走つた。河原のグラウンドで高校の野球部が練習試合をしているのを、しばらく見てから、マンションに帰つた。

母はすでに起きていて、昼食の用意をしていた。

「昨夜はごめんね。お客様にどうしても付き合つてほしいって、頼まれたものだから。おかあさんの商売つてお客様あつてのものでしよう。断わりきれない場合もあるのよ。本当にごめんなさい」

いつもと同じ言訳にうんざりしながら、浩一は「毎度のことですから、気にしてませんよ」とこれまで同じように答える。

「その言い方はやめてちょうどいい」これも同じだ。

ハムエッグと野菜サラダの昼食のときも、いつもと同じ話が蒸し返された。浩一の大学進学のことだ。

「きのう来たお客様がね。大学へやる金があるなら、子供は大学へやつた方がいいっていうのよ。その人ね、高卒なんだけど、大分苦労したみたいね。出世は遅れるし、結婚にも差がつくし、銀行から金を借りる場合でも信用がまるで違うって言つてたわ」

「で、その人、今何してるの」

「独立して、印刷会社を経営しているらしいわ」

「だつたら大学を出なくとも、立派にやつていけると証明しているようなものじやないか」

「何言つてゐる。成功した人の言葉だから、重みがあるんじやないの」

失敗した人の間違ひではないかと思つたが、浩一は黙つていた。母は浩

一が何も言わないでいると、どうして大学に行つてくれないの、わたしがこんな商売をしているのも、みんな浩ちゃんに立派な人になつてもらいたいからなのよ、こんなことじや死んでも死にきれないわ、あなたのおじいちゃんに申し訳なくて天国にも行けやしない、とどんどん愚痴が続くのである。

浩一は無視して昼食を食べ終えると、ごつつかんと言つて立ち上がり、自分の部屋に引っ込んだ。彼はその時やつぱりサイパンに行かなきや駄目だと考えていた。

翌朝、浩一は一時間ほど早く起きて、ショートパンツのジョギングスタイルに着替えた。母が物音に気づいて起きてきて、浩一の恰好を見るなり「きょうは会社は休みなの?」ときいてきた。

「いいや、きょうから会社へは、走つていくことにしたから」と浩一は答え、母がまた何か尋ねようとするのも構わずに、マンションを出た。

堤防まで行つてその上を走り、国道の通つている橋を渡れば、すぐ右側に会社があつた。会社へはいつもバイクで通つていたが、大体十分くらいかかっていた。三倍かかるとして三十分、大目にみて四十分もあれば着くだろうと思つていたが、途中でへたばつてしまい、会社に着いたときには定刻を過ぎていた。主任や先輩が浩一の恰好を見て、どうしたんだと不思議そうな顔をしたが、浩一が、足腰を鍛えるために、あしたから走つてきますのでよろしくと答えると、呆れた顔をした。帰りはさすがに疲れていたので一時間も走る気にはなれず、バスで帰つてきた。

次の日、ふくらはぎや太腿の筋肉が痛かつたが、やめようという気などさらさらなくて、浩一は一時間半ほど早く家を出た。母はまだ眠つていた。平日は二人が顔を合わすことは、ほとんどなかつた。浩一は十二時前に寝てしまふし、母が帰つてくるのは一時か二時、朝は母の起きる一時間前に浩一が起きるという具合だ。

浩一は堤防の上まで来ると、トレーナーを脱いで腰に巻いた。体が暖まつてくるからである。ランニングシャツ姿になつて再び走り出す。十分ほど走つて息が上がつてきたころ、彼はトレーナーがなくなつていることに気づいた。立ち止まつて振返ると、二十メートルほど向こうに紺色の塊が

落ちている。浩一はゆっくりとした足どりで戻つていったが、十メートルくらいまで近づいたとき、横から黒い犬が現れたと思つたら、トレーナーをくわえて河原のほうへ降りていつてしまつた。あつと思つて見ていると、今度は白いトレーニングウェアを着た女の子が堤防の下から上がつてきて、「タロー、タロー」と叫んだ。下を見ると、河川敷の道のところで、犬がトレーナーと格闘していた。浩一はあわてて堤防を降りていった。

犬はドーベルマンの子供らしかつた。トレーナーを歯で引き裂いている。浩一はしつしつと言いながら、トレーナーの袖をつかもうとしたが、犬の動きがはやすすぎてつかまえられない。

「タロー、やめなさい」と言いながら、女の子がやつてきた。彼女は犬の頸を腕で抱え込むようにしておとなしくさせると、トレーナーを引っ張つたが、犬はくわえたまま放さない。「タロー、放しなさい」と言つて、女の子は犬の頭をぼんぼんと叩いた。それでようやく犬は口を開けた。手にとつてみると、トレーナーは胸のあたりに大きく穴が開いていた。

「どうも、すいません」女の子は犬に鎖をつけると、浩一に深々と頭を下げた。「今はお金を持つてませんが、必ず弁償させていただきますので、おところとお名前を教えてもらえますか」

「いいよ、いいよ、そんなの。どうせ古いトレーナーなんだから」

「いいえ、それじや申し訳ありませんから」

「いいよ、ほんとに。それじや」と浩一は破れたトレーナーを首に巻いて走り出した。

「ちょっと待つて」と女の子も堤防を上つてくる。

「悪いけど、会社に遅れるから」

「会社つて、どこにあるんですか」少し後ろから、女の子が犬と一緒に走つてくる。

「※※大橋を渡つたところ」

「あんなところまで走るんですか」

「そう」

「※※電機にお勤めなんですか」

「いいや、ただの出版社」

「いいや、ただの出版社」

声がしなくなつたなと思つて後ろを見ると、女の子は立ち止まつて手を振つていた。

昼休みが終つて仕事を始めようとしたとき、浩一は面会の人が来ているということで事務所に呼ばれた。行つてみると、朝の女の子だつた。浩一はちよつとびつくりした。テニスウェアを着ているせいだらうか、朝のときより大人っぽく見えた。高校生のような感じがしていたが、ひよつとしたら自分より年上かもしれないと浩一は思つた。

「けさはどうもすいませんでした。タローはまだ子供だから、何にでもじやれつくるせがあつて。これ、受取つてください」

女の子は白い封筒を差し出した。浩一は何だかよくわからないまま、素直に受取つてしまつた。「じゃあ」と言つて女の子は事務所を出、浩一も一緒に出た。

「でも、どうしてここがわかつたんだろうなあ」

独り言のように浩一がつぶやくと、女の子は含み笑いをしながら、「このあたりに出版会社つて、ここしかないでしよう。それに、ジョギングしながら出勤する人つて、あなたしかいみたい」

「なるほど」

女の子は待たせてあつた乗用車に乗り込むと、手を振つてみせた。浩一も手を振つて返したが、いささか驚いていた。乗用車は国産の最高級車だつたし、その車に乗つてテニスに行くなどというのは、いかにも金持のお嬢さんというのにぴつたりだつた。車が角を回つて見えなくなつてしまふと、浩一は急に腹が立つてきつた。わざわざ自分をさがしにきたのも、金持の退屈しのぎのような気がしてきたからだ。

浩一は封筒を開けてみた。中には一万円札が入つていて。彼はその金額の大きさに、また腹を立てた。

翌日、浩一はもらつた封筒に五千円札を入れ、それを手に持つて出勤した。あの娘に突つ返すためである。だが、きのう彼女と会つたあたりに来ても、それらしい姿は見当たらなかつた。浩一は十分ばかり様子をみていたが、諦めて会社に向かつた。

次の日も封筒を持って出たが、会えなかつた。浩一は返すのを諦めた。

そして土曜日、浩一が堤防を走っていると、「おはよう」と後ろから声をかけられた。見ると、彼女だった。犬も一緒だ。浩一はしばらく肩で息をして呼吸を整えてから、「この前からあんたに会おうと思って、さがしていたんだ」と言つた。

「あれじや不足だつたかしら」

「多過ぎるんだよ」

女の子はおかしそうに笑つた。

「だつたら、いいんじやない？」

「とにかくおれは気分が悪いから、五千円だけはもらつておくけど、あと五千円はあんたに返すよ」

女の子は浩一の剣幕に驚いたふうだつたが、すぐに笑顔に戻ると、ペロリとお辞儀をした。

「ごめんなさい。わたし、別にそんなつもりで一万円にしたわけではないんです。最初はわたしも五千円くらいが適當かな、なんて思つたんだけど、少ないつて文句を言われたら困るなつて思い直して、一万円にしたんです。本当にごめんなさい」

女の子があまりにも素直に謝るものだから、浩一は何か悪いことをしているような気になつた。

「別にそんなに謝らなくてもいいよ。おれはただ五千円でいいつて言つているだけなんだから」

「わかりました。それじやあ」と言つて、彼女は左手を差し出した。

「お金？ 悪いけど、今は持つてないんだ。おとといまでは手に持つて走つてたんだけどね。月曜じやどう？」

「月曜日？」女の子は思案する顔つきをした。

「じゃあ、火曜日は」

「火曜日ねえ……」

犬がじれつたくなつたのか、河原に降りようとし、女の子は鎖を引張つて支えた。

「わかつた、わかつた。あんたの家まで持つていくよ。家はどこ？」
「大きいけやきのあるロータリー、ご存じ？」

「ああ、知ってるよ」

「あそこのそば」

「わかつた。それじやあ持つていくよ」

そう言うなり、浩一は走り出した。そして、しばらく行つて振返ると、堤防を降り始めている女の子に向かつて「名前は何?」と大声で聞いた。

「柳原でーす」と女の子は答えた。

土曜日は三時で会社は終りだつた。浩一は土曜日くらい走つて帰ろうかと思つたが、どうせ踊るんだから無理することはないとバスにした。マンションに帰つて悟と由美に電話すると、二人ともいて、踊りにいくと言う。いつものようになつて、八時に店の前で落ち合つことにした。八時まで大分時間ががあるので、映画でも見て、どこかで食事をとることにした。土曜日だけは、夕食の用意がされてないのだ。食事の用意がしてあつても、土曜日は食べないことが多いくて、いつのまにか土曜日は夕食なしということになつてしまつたのだ。

母は風呂に入つていた。特別製のヘチまでボディマッサージとかいうやつをするので、一時間くらい入つてゐるのはざらなのだ。それがすむとさらに一時間かけて化粧をし、和服ならば三十分、ドレスならば十五分。それで準備完了。あとはタクシーで出勤するわけだ。浩一は母の化粧をする姿も、化粧のあと姿も見たくないのでさつさとマンションを出るのである。

浩一はついでに、あの女の子のところに金を持つていこうと封筒をポケットに入れて、表に出た。バイクに乗つて、ロータリーのところまで行つた。あたりには金持の屋敷が石垣や生垣を境にして、並んでいた。けやきの回りには石のベンチが四つ置いてあつて、浩一はその前にバイクをとめ、柳原という家を探した。だがなかなか見つからなかつた。ロータリーのそばというには当たらないと思われるところまで見て回つたが、なかつた。彼女が嘘をついたのかと思いながら、石のベンチに坐つていると、フリルのついた白いワンピースを着た女の子がやつてきた。ちようどいい、ちょっと尋ねてみようと思つて顔を見ると、あの女の子だつた。何だか狐につけられたみたいだつた。

「こんにちわ」と女の子が言つた。

「どこから出てきたの。このへんに柳原なんて家はないよ」

「あそこよ」女の子の指を差した方向を見ると、もうひとつ向こうの辻にある屋敷が目に入った。庭にある樹木の切れ目から、二階の部分が見えた。

「あそこじやロータリーのそばとは言えないぜ」

「いいじやない。こうして会えたんだもの」

そりやそりやただとつぶやきながら、浩一は尻のポケットから封筒を取り出し、女の子に渡した。礼を言つて受取ると、彼女は、バイクに目をやり、「これで来たの」ときいてきた。ああと答えると、「※※ビルの前まで乗せていって下さらない」ときた。

「これは五十ccだから、人は乗せられないの」

「おまわりさんに見つからなきや、いいんでしょ」

「大胆なご意見ですねえ」

※※ビルはディスコにも近いことだしと、浩一は女の子を乗せた。彼女は叶子といい、良家の子女の集まる女子大の二年生で、柳原産業という住宅設備をつくっている会社の社長の娘だった。運転手つきの車で行けばいいのにと言うと、きょうはお休みなのということだった。

警官にも見つからずに※※ビルの前に着き、行こうとすると、「ついでに買物につきあつて下さらない。もしお暇でしたら」と叶子は浩一の腕をとつた。図々しい女だなあと浩一は思ったが、どうせ八時までは暇なんだからとつきあうことにして。

叶子はビルの一階にある大きな靴屋の中に入つていった。一緒に入つていくと、奥にいた四十半ばの男が叶子を見つけて、やつてきた。

「これは、これは、柳原のお嬢さま。いつもお引きたてにあずかり、ありがとうございます。どうございます。それできょうは何を……」

「テニスシューズを見せていただこうと思つて」

「それでしたら、こちらへどうぞ」

男は右手を伸ばして叶子を案内し、そのとき浩一と目があうと、丁寧に礼をした。浩一はばつが悪かつた。彼の恰好はといえば、体にぴったりと張りついたスリムのジーンズに、履き心地はいいけれど薄汚れてよれよれ

になつたバックスキンの靴、それを素足に履いている。上は格子縞のスポーツシャツに黄色のセーターを背中から首に巻いており、頭はリーゼントだ。どうみても叶子の連れにしては、おかしいだろう。店の人間はそう思つてゐるだらうと思うことが、浩一を居心地悪くさせたが、彼はそんな気持ちに逆らうように、店の奥のほうを見て回つた。そこには彼の一ヶ月分の給料と同じくらいの額の靴が並んでいた。

叶子はカードで支払いをすませ、届けてくれるように頼んでから店を出た。

「どこでもあんなふうに最敬礼で迎えてくれるのかい」

「お金に最敬礼してるのでよ」

「金があるつて、いいねえ」

「本当にそう思う？」

「ああ」

「金持はね、みんな自分に価値があるつて思つてゐるけど、価値があるのはお金なのよね。お金つていう価値にくつついてゐるだけ。その錯覚に気づかずに生きているのよ」

おかしな女だと浩一は思い、ちょっと彼女に興味を覚えた。

「ねえ、お腹すかない？ 何か食べましょくか」

「おれはどうせ外食だから構わないけど、そつちはいいの」

それには答えないで、じやあ行きましょくと叶子は歩き出した。彼女の案内で、二人はスペゲツティとサラダの店に入った。店内は女の子でいっぱいだつた。浩一はナポリタンの大盛を頼んだが、大盛はやつていてないと言われ、あわててメニューを見て、チーズバーガーとサラダのセットを追加注文した。「よほど、お腹がすいているのね」と叶子はおかしそうに笑つた。

「なにしろ、八時から夜中まで踊らなくちゃならないから、腹ごしらえだけはたっぷりしておかなくちゃあね」

「踊るつて、ディスコ？」

「もちろん」

「おもしろそう。ねえ、ねえ、わたしもつれていつて下さらない」

「ああ」

「ああ」

「一度も行ったことないの？」

「ええ」

「そりやもつたいないよ。健康増進、ストレス解消にはもつてこいだし、長いこと踊っていると、体中の骨が体の中で浮いているような感じになつてさ、これがまたいい気持なんだ」

食事がすんで、二人はバイクに乗つて『ジミーの店』に行つた。食事代は叶子がおごつてくれたので、ディスコの入場料は浩一が払つた。出入口の壁のところに張つてあるポスターを指差して、「これに出ようと思つてるんだ」と叶子に行つた。

「優勝したらサイパンへ御招待つて書いてあるだろう。サイパンは、おれのおじいちゃんの戦死したところなんだ」

「優勝するつもり？」

「まあね」

「ジョギングで会社に通つているのも、そのため？」

「それだけじゃないけど、まあ、それもある」

店の中は七時前だというのに、もう人いきれでむせかえつていた。フロアに近づくと、鼓膜を圧するディスコサウンドが響き、音が皮膚を打つた。浩一はぞくぞくと身震いがくるのを感じた。後ろを振返ると、叶子が人波に押されて、壁際で小さくなつていた。浩一は叶子に近づき、彼女の手を取ると、フロアを取り囲んでいる小さなテーブルの間を進んでいき、女の子が一人いるところに相席させてもらつた。そして、カウンターにいき、チケットをコーラに替えて席に運んだ。

浩一はすぐに踊りたかつたが、叶子が感心したような表情で踊つている連中を眺めているだけなので、我慢した。曲と曲の合間には、D Jのボックスのある位置だとか、振りの練習をするための鏡が壁一面に張つてある場所、ドリンクをもらうカウンターの位置などを、指で教えた。四曲ほどサウンドが流れると、浩一は我慢できなくなり、踊ろう、踊ろうと叶子の手を取つて、できるだけ人波の中へつれていつた。まわりに人のいるほうが、初めてでも大胆に踊れるし、気分ができるのである。

始めのうち叶子は手足の動きも小さく遠慮がちであつたが、浩一が、も

つと大きくと手本の踊りを見せると、だんだん調子に乗ってきた。叶子の踊りが滑らかになると、浩一もうれしくなり、得意のエレクトリックダンスもやつてみせた。

五曲続けて踊った後、叶子が思い出したように腕時計を見、「大変、もうこんな時間」と驚いてみせた。「帰らなくちゃ」

「まだ八時過ぎだぜ。宵の口だよ。面白くなるのはこれからなんだけどなあ」

「わたしもそう思うけど、世の中にはそうは思わない人もいるものだから」

次の曲が始まり、二人は踊っている男女の間をぬつて出口に向かつた。浩一はフロントに声をかけてから、叶子と一緒に店を出た。悟と由美と悟の彼女が、ネオンサインの下で人待ち顔で立っていた。悟の名前を呼ぶと、三人はいっせいに振向き、何だ、来てたのなどと言いながら近づいてきた。悟はまた別の女の子をつれていた。

「それじやわたし、帰ります。どうもありがとうございました」

叶子は浩一に言い、やつてきた悟たちに「ディスコっておもしろいですね」と声をかけてから、大通りのほうに歩いていった。

「何だ、あの子」悟が怪訝な顔をした。

「先約があるんなら、言つてくれればいいのに。わたし来なかつたわよ」と由美が怒つたように言つた。

「なりゆきだよ。なりゆき」浩一はわざと素つ気なく言つた。

次の日浩一は由美を誘つて、映画に行つた。母と一日中顔をつきあわせているのが嫌だつたせいもあるが、由美に、ダンスマラソンのパートナーになつてくれるよう頼み、勝つためにはスタミナをつけるために毎日走らなければならないことを、確實に約束させたかつたのだ。しかし由美はパートナーになることはすんなりと承知したが、走る話になると「どうせ遊びじゃない」と相手にしなかつた。「勝つたらサイパンだぜ」と言つても、「二十万も出せば行けるじやない」ときた。

確かにその通りだつた。だが浩一にとつて、金で行くことには何の意味もなかつた。ダンスマラソンに勝つて行くからこそ、祖父をたたきつぶす

何かが得られるかもしれないのだ。金で行けば、祖父に敗北することになるだろう。そんなことを話してもわかつてくれそうもないのに、浩一は由美を説得することを諦めた。

翌朝、浩一がいつものように堤防を走っていると、河原の道を叶子が犬をつれて走っているのが見えた。白のトレーニングウェアと黒い犬でぐにわかつた。

「おーい」と浩一は呼んでみたが、彼女は気がつかない。浩一はちよつと考へてから、「タロー」と大きな声を出した。叶子が振向いたのを見て、浩一は手を振った。叶子は気づいたらしく、鎖を引張つて犬を制した。堤防に上つてくる叶子に合わせるように、浩一はゆっくりと走つた。

「この間はどうもありがとう」叶子が息を弾ませながら言つた。「でも迷惑じやなかつた? わたしがむりやりついていつて」

「全然」

「お友達と約束があつたんでしょう?」

「ああ、あれ。向こうが早過ぎたんだよ。それより、そつちは大丈夫だつたのかい?」

「なに?」

「門限だよ」

「ああ、門限ね。でも、そんなものないのよ」

「だつたら、何もあわてて帰ることもなかつたのに」

「ないほうが余計に厳しいつてこともあるのよ」

犬が浩一の靴を臭ぎまわり、鎖が脚に巻きついた。

「タロー、やめなさい」叶子が鎖を引張つた。「タローつたら、あなたの匂いを覚えてしまつたみたいね」

そのとき浩一はふつと、この子をパートナーにしたらいんじやないかと思つた。

「変なこときくけど、体力に自信ある?」

「え?」

「テニスをやつてるくらいだから、スタミナはあるだろう?」「一体、何のこと? どうしてそんなことをきくの?」

「おとつい、おれが、ダンスマラソンに出るつていうことは話しただろう。そこでお願ひがあるんだけど、おれのパートナーになつてくれないかな」「わたしが？」

「そう」

「あなたのお友達に大勢いるんじやないの、もつとふさわしい人が誰も優勝なんか狙つていなかから、おれが走ろうなんて言つたら、降りちまうんだよ」

「ダンスマラソンて、何時間くらい踊るの？」

「さあ、二十時間か三十時間じやないのかな」

「うわー、そんなに長いの。とつても無理ね」

「やっぱり、だめか。仕方がない、他を当たるか」

「ごめんなさいね」

「あんたの友達にさ、何時間踊つてもびくともしない女の子がいたら、おれに紹介してよね」

「心当たりを当たつておくわ」と叶子は笑いながら言つた。

「じゃあと言つて、浩一は再び会社に向かつて走り出した。

次の日から、浩一は三十分遅く家を出るようになつた。息が切れなくなり、途中で休む必要がなくなつたからだ。そのため叶子と顔を合わさなくなつたが、金曜日に反対方向から走つてくる彼女に出会つた。犬はつれていなかつた。叶子は走る向きを変えながら、「ダンスマラソンのパートナー、見つかつたの」ときいた。浩一は叶子に合わせて速度を緩めた。

「だめ、だめ。努力してまで勝とうなんて物好きはいないね。走るくらいなら、自分のお金でいくわつて言われちゃつたよ」

「それで、どうするの」

「どうもこうも、オリーブみたいな女の子で我慢するしかないな」

「わたしはどう？」

「浩一は立止まつた。

「やつてくれるの」

「そのつもり」

「毎日走るんだぜ」

「もちろん」

「やつたね。これでちよつとは希望が出てきたな。それじゃあ、ジルバを教えたきやいけないから、明日この前行つたディスコで会おうか」

「明日はちょっと無理だわ」

「だつたら、日曜日は？」

「日曜のお昼なら」

「昼はディスコやつてないからなあ。……そつちの家はどう。おれ、教えにいくよ」

「わたしのところより、あなたの家のほうがいいんじやない。レコードもあるんでしょ」

「おれのマンションでもいいんだけど、おふくろがいるからなあ」

「お母さんがいてもいいじやない。わたしにはそのほうが安心だし」

「おれにはそんな気はないぜ」

「冗談よ」

「よし、決めた。日曜の二時にバイクで迎えにいくよ」

「いいわ」

日曜日、ロータリーのところを曲がると、叶子がこちらに歩いてくるのに出会つた。浩一はバイクの後ろに彼女を乗せ、来た道を戻つた。

浩一の母は居間にいたが、二人が玄関を入れると、ドアを開けて顔をのぞかせた。

「こんにちわ。おじやまします」と叶子が頭を下げた。

母は叶子を上から下までじっくりと見てから、「いらっしゃい」と抑揚のない声で言つた。浩一は叶子を玄関横の自分の部屋に入れてから、居間へ行つた。

「きょうは何をするの。また踊りの練習？」

「ああ」浩一は冷蔵庫を開けて、缶入りコーラを一本取出した。

「レコードをかけるのはいいけど、あまりうるさくしないでね」

「わかってるよ」

「きょうの子は、今までつれてきた女の子のうちで、一番感じがいいわね。

高校のときのお友達？」

「大金持のお嬢さんなんだから、粗末に扱つたらばちが当たるよ」「何言つてるの。馬鹿なことばかり言つて」

「うそだと思うのなら、直接本人にきいてみなよ。柳原産業の社長の娘だつて言うぜ」

「柳原産業つて、一部上場会社の？」

「一部上場かどうかは知らないけど、住宅設備をつくつてている会社だよ」「それならやつぱり一部上場の会社よ。そこの娘さんがどうしてこんなところへ。まさか、おまえ、だまされてるんじゃないだろうね」

「うるさいなあ。だまされているかどうか本人に、きけばいいだろう」

浩一が盆にコーラとコップふたつをのせて持つていこうとすると、母が「わたしが持つていくから、おまえ先にいってお相手してなさい」と盆を取り上げた。そして浩一が部屋へ戻る後ろから、財布を持ってついてきた。

「どこへ行くの」

「ちよつとケーキを買つてくるのよ」

浩一は母の態度の変わりようにあきれた。

部屋では叶子がLPレコードをいろいろ取出して、眺めていた。LPレコードは二百枚くらいあり、浩一の唯一の財産だった。まず基本ステップから教えた。男とは全く正反対の足の動きを浩一がやつてみせ、それを叶子が真似をすることから始まつた。何回かやつて要領が飲み込めたところで、今度は実際に組んで踊ることになる。ジルバの曲をかけ、浩一は左手で叶子の手をにぎり、もう一方の手を彼女の脇腹に当てた。弾力があつて、意外としつかりとしていた。

始めのうちは叶子のほうがリズムに乗れなくて立往生したが、そのうち慣ってきて、叶子も楽しむ余裕が出てきた。基本ステップを覚えたところで、次は右廻りと左廻りを教えることになった。ダンスマラソンの規定では三ステップ以上の踊りの連続ということになつていてるからだ。他にもいろいろ変化はあるが、体力を消耗しないためには、この三つが適当だらうと考えたのだ。

足の動かしかたを教えているとき、母がコーラとケーキを盆に載せて入つてきた。

「浩一、ひと休みしたら」母は机の上に盆を置いた。

「こんな狭い家にお出でいただいたいて、申しわけありませんね。踊りの練習ですか。この子はね、どういうわけか踊りだけは得意なんですよ。だれに似たんでしょうね。この子の父親もダンスなんかからつきし駄目でしたし。わたしの父が若いころ、ダンスホールに通つていたという話を聞いたことがあるから、あるいはおじいちゃんの血かもしれないわね。わたしは踊りなんかより勉強をしてほしかったんだけど、この子つたら大学には絶対いかないなんて強情はつて。お嬢さんはどちらの学校ですか。……あら、名門じやないの、えらいわねえ。浩一、あなたも少しは見習つたら」

「何かこげてるんじやないか」浩一は鼻をひくつかせた。

「ほんと？ 何かしら」母はあわてて出ていった。浩一はドアを閉め、鍵をかけた。

「べらべらとよくしゃべるだろう。参っちゃうよ」

「でも、おもしろそうなお母さんね」

その日は三時間ほど練習をして、終りにした。叶子は飲み込みがはやくて、三つのステップのほかにいくつかの変化も覚えてしまつた。バイクで叶子を屋敷の近くまで送つていつた。門の前まで送るよと言うと、モニターカメラがあるからここでいいわとバイクから降りた。毎日ジョギングだぜと言ふと、叶子はうなずいた。

翌朝浩一が堤防を走つていると、下から名前を呼ぶ声がした。叶子だった。浩一は足踏みをして待つた。

「時間どおりね」と叶子が言つた。
「毎日同じことの繰返しだからね」

叶子は橋のたもとまで一緒に走ると言つた。二人は並んで走り始める。一人で走るより二人のほうが充実した感じがあつた。走つているということが、より強く意識されるのだつた。浩一はバレー部でのランニング練習を思い出していた。

叶子は途中であごを出したが、橋まで一度も休むことなく走り通した。欄干に片手を置き、体を折り曲げた姿勢で叶子はしばらく荒い息をしていた。

「無理することはないんだぜ。徐々に鍛えていけばいいんだから」

「でも」と叶子は呼吸を整えながら言つた。「あなたがいくら鍛えても、わたしがあなたと同じくらいのスタミナをつけなくちゃ、優勝は無理ですよ。わたしのせいで負けたなんて言われたら、しゃくだもの」

「えらい」

二人は橋を渡つていき、真中あたりで欄干に両腕をのせて川の流れを見た。春の風が川を渡つて、二人に吹きつけていた。二人の後ろをときどき自転車が通り、さらに後ろを自動車が通り過ぎた。

「お父さんは亡くなつたの？」と叶子がきいた。

「生き別れ」

「じゃあ離婚されたの？」

「そういうこと」

「変なこときいて、ごめんなさい」

「別にどうつてことないよ。よくある話なんだから」

「それできびしくない？」

「何が」

「お父さんがいないってことが」

「こんなもんだと思つてゐるから、何ともないね」

「いくつのとき、別れたの」

「三つのとき」

「それから一度もお父さんには会つてないわけ？」

「ああ」

しかしそれは嘘だつた。叶子がしつこく質問してくるのを避けたかったからだ。本当は十歳のときに、一度だけ会つてゐる。小学校の帰り道で男の人に呼止められ、その人は父だと名乗つた。その人は紺の背広を着て、浩一の目にはとても立派な人に見えた。その人は車に乗せてあげようか、とか、おもちゃを買ってあげよう、何か食べたいものはないか、などと矢継ぎ早に言つたが、浩一はその都度首を振り続けた。その人は最後に内ポケットから財布を取り出し、千円札を引抜くと、浩一の手に握らせた。浩一は握りしめた千円札をしばらく見ていたが、突然こぶしを開くと盲滅法に

走り出した。アパートに帰り着き、浩一は水道の蛇口から直接水を飲んだ。胸の動悸がなかなか治まらなかつた。浩一はそのことを母には黙つていた。

それから何日間か浩一は道を歩くとき、あたりに注意を払つたが、二度と父という人は現れなかつた。

「それじや、お母さんは一人であなたを育てたわけね」

「そういうこと」

「えらいわねえ。わたしの母なんかとは大違ひ」

「おふくろさんのこと、嫌いなのかい」

「好きとか嫌いとかの問題じやないのよ。母はそれはとつてもいい人よ。それは認めるわ。でも、父がいなければ何もできない人なのよ。そのこと

に自分で気づいてないし。わたし、そんな人になるのはごめんだわ」

「金があれば、別に苦労することなんかないと思うけどなあ」

「父と同じようなことを言うのね。でも本当にお金さえあれば幸せになれると思う？」

「幸せになれるかどうかわからないけど、ないよりもあつたほうがいいっていうことだけは確かだね。そつちには本当に金がないときのみじめな気持ちなんかわかりっこないだろうけど」

「そんな時があつたの？」

「中学二年まではね。おふくろが水商売に入つてからは楽になつたけど

「お母さん、水商売だつたの」

「ああ。きのう会つたとき、気づかなかつた？」

「いいえ、全然」

叶子は黙り込み、川の流れをみつめた。

「わたしに姉が二人いるんだけど、二人ともわたしと同じようなことを言つていたのよ。それが両親の勧める結婚にあつさりと乗つちやつて。一種の政略結婚よ。父の思惑どおりに」

「それであんたは、そういうことは絶対にしないっていうわけ？」

「当たり前よ」

「ふーん、そういうもんですかと浩一はつぶやいた。

「わたしの考え方って、わがままかしら。ねえ、どう思う」

「どう思うつて言われでも、ただ、金持は金持なりにいろいろと悩みがあるんだなあと思うぐらいで」

あなたつておもしろい人ねと言うなり、叶子は吹き出した。浩一もおかしくなつて、一緒に笑つた。

土曜日、一時間だけ踊るという約束で、二人は開店早々のディスコに入った。一時間の間、ジルバばかり踊つていた。テンポの早過ぎる曲でも、適当にステップを踏んで踊つた。まだ満員ではなかつたので、体を大きく動かせるのが気持よかつた。

店の前で別れるとき、叶子が一冊の本をバッグから取出した。「父の本棚にあつたから、借りてきたの」と言つて、叶子はその本を浩一に手渡した。ある新聞社の発行しているサイパン島での戦闘を記録した本だつた。浩一の家にはそういう類の本は一冊もなかつた。

「おじいさんのことが載つているかも知れないわよ」と叶子が言つた。

浩一は叶子の勘違い——彼がサイパンに行きたがつてているのは、祖父の供養のためだという——に気づいていたが、黙つていた。

翌日昼まで寝ていた浩一は昼食もそこそこに自分の部屋に引っ込むと、借りた本を読み始めた。休日だというのに部屋にこもつている息子を珍しがつて、ときどき母が顔をのぞかせたが、浩一はその都度ひろげた週刊誌を本の上にのせて隠した。

浩一は四日間かかつて、その本を読み終えた。彼がその間ずっと思つていたのは、日本軍というのはどうしてこんなに愚かだつたんだろうということだつた。戦争に勝つにはまず合理的でなければならぬのに、日本軍のやつていることは合理とは全く反対のことだつた。まるで負けるために戦つているようなものだつた。浩一は腹を立てながら読んだ。負け戦の記録を読むのは気持のいいものではなかつたが、日本軍が奇襲をかけて戦果をあげたり、鳴りをひそめていた榴弾砲が火を吹いて米軍に損害を与えた箇所にくると、浩一は思わずやつたと声を出したりした。祖父の名前はどこにも載つていなかつた。ないことは読むまえから、大体察しはついていた。名前が載るくらいなら新聞記者が取材にきただろうし、そうなればおふくろはこの本を買つただろうと浩一は考えたからだ。名前が載つていな

くとも、浩一は祖父がどこの戦闘で戦い、あるいは戦死したのか知りたい気がして、愛知県一宮市出身ということだけを手掛かりにして探してみたが、やはりわからなかつた。日曜日を待つて、母に祖父の所属部隊の名前や、サイパン島のどこの戦闘で死んだのかをきいてみたが、母は何も知らなかつた。「戦友の名前なんか聞いてないかな」と言うと、「どうしてそんなことをきくの」と逆にきき返された。

浩一は自分の部屋から本を持ってきて、母に見せた。きっと驚くだろうと浩一は思ったが、母はぱらぱらとめくつてみただけで、すぐに返した。あまりにそつけなかつたので、「読んでみる?」とも言えないほどだつた。

ダンスマラソンを一週間後にひかえた土曜日、浩一と叶子は開店直後のディスコに入つて、小さく踊る練習をした。いつもなら七時に叶子は帰るのだが、今夜は予行演習ということで、九時までぶつ通しで踊ることにしたのだ。浩一は一時まで踊り続けて、疲労の具合がどの程度になるのか確かめてみたかったが、叶子の方は九時が限度だつた。来週はテニス部の一日合宿旅行という名目で両親の許可を取つてある。

八時過ぎに悟と由美がやつてきた。浩一たちが踊つてゐる横に、彼等も踊りながら近づいてきたのだ。

「浩一、おまえ、来週その子と出場するのか」悟がディスコサウンドに負けないように大声を出した。

「ああ」

「ランニングしてゐるんだつてな」

「ああ」

「自信はあるのか」

「まあな」

「無理するなよ」悟が笑つてゐる。

「あんたもランニングしてゐるの?」叶子に近づいたとき、由美が大声で言つた。叶子はターンをしてから、由美にうなずいてみせた。

「ランニングよりも踊りのほうを鍛えるのが、先決じやないの」と由美が皮肉つたが、叶子には聞こえなかつたようだ。

「踊りは関係ないよ。問題はスタミナだ」と浩一が代わりに答えた。

九時過ぎに叶子が帰り、浩一は悟たちと一時ごろまで踊った。店の前で彼らと別れ、バイクに乗ったが、しばらく行つて信号待ちで止まつたとき、横のほうから派手な女の笑い声が聞こえてきた。見ると、ビルの中から中年の男と水商売風の女がからみ合いながら出てくるところだった。ビルにはアダルト専用のディスコがあつた。女のドレスが、おふくろの持つている服に似ているなと思いながら浩一は見ていたが、二人が車道のほうに向き直つて、すぐに女が母であることに気づいた。浩一はあわてて首を横に向けた。

信号が青に変つたが、浩一は発車しなかつた。二人に変に思われてはと、彼はヘルメットをかぶることにして時間をかせいた。二人は彼の後ろでタクシーを待つていた。浩一はサイドミラーでその様子を盗み見ながら、ときどきアクセルを空ふかしして、エンジンの調子を見ているふりを装つた。客の乗つたタクシーが五台通り過ぎ、六台目がようやく空車だつた。二人はそれに乗り、浩一はそのタクシーの後をつけた。ここを右に曲がれば自分たちのマンションの方角だという交差点を、タクシーは左に曲がつた。浩一は急に動悸を感じた。

タクシーは十分ほど走つて、ある高層ホテルの正面玄関に乗りつけた。浩一はだいぶ手前でバイクを止め、様子をうかがつた。男の肩につかまるようにして女は車から降り、二人は腕を組んで中に入つていつた。浩一はしばらくの間、二人の入つていつたガラス張りの玄関を見つめていたが、まあ、そういうこともあるさとつぶやくと、再びエンジンをスタートさせた。

あからさまな連れこみホテルでなかつたことに、浩一はいくぶん救いに似た気持を感じていたが、そのうち自分が、ひよつとしたらただの話をすりだけのため、ホテルのバーにでも入つたのではと考えてしまふことに気付いて、逆に腹が立つてきた。これからは、じいさんの話を持ち出しておれのことをとやかく言うのは、絶対に許さないという気持だつた。

マンションに帰り、浩一は風呂に入つてすぐにベッドにもぐり込んだが、なかなか寝つかれなかつた。こうなつたら朝まで起きていておふくろを迎えてやろうかと思つたが、どうしようかと考えてゐるうちに眠つてしまつ

た。

翌朝十一時ごろ起きた浩一は真っ先に玄関を見て、母の靴があることを確かめてから服を着替えた。居間にいつたが、母はまだ起きていなかつた。浩一はトーストにバターとマーマレードをたっぷりとぬつて食べ、牛乳を紙パックから直接飲んだ。ゆでたまごが欲しくなつて、小鍋に卵二個と水を入れ、ガスレンジにかけた。こうしているうちに、おふくろが起きてくるだろうから、そのときはきのうのことを聞き出そようと浩一は思つていたが、よく考えてみると、わざわざ聞き出してもどうということはないことに気づいた。そう思うと急に、こうして母の起きるのを待つて居るのを心地悪く感じ出した。浩一はガスの火をとめ、半熟にもなつていない卵をスプーンですくつて食べると、表に飛出した。

堤防の上を走つて橋のところまで行き、再び戻つてくると、河原の芝生に腰を降ろして少年野球を見物した。近くの外野にあたるところでは、五、六人の女子高校生が輪になつてバレーボールをやつていた。めつたに球が飛んでこないのだ。浩一が横になつて野球を見ていると、バレーのボールが目の前に飛んできた。彼は上半身を起こしてボールを両手でつかみ、やつてきた女の子に投げ返したが、急にバレーボールがやりたくなつて「ちよつと入れてくれないかな」と女の子に声をかけた。女の子は戸惑つたような顔をして戻つていき、仲間の女の子と浩一のほうを見やりながら、何やら相談しているふうだつた。だめかなと思つたが、すぐに、いいですよという声が返つてきた。浩一は立上がりつてジーンズの尻を手で払い、彼女たちの輪の中に加わつた。

浩一はらくらくとボールを返し、隣の女の子がそらしたボールをダイビングレシーブで拾つたりした。女の子たちは歎声を上げ、彼女たちの質問に答えて、バレーの選手だつたことや高校の名前を教えた。スパイクを見せてほしいというので、一番上手な女の子のトスでスパイクをして見せた。レシーブするわと三人の女の子が待つていてたが、球の勢いに悲鳴をあげて体をよじつた。ついでに浩一は変化球サーブも披露した。右に曲げたり、左に曲げたり、あるいは回転をつけずにふらふらと落したり、その度に女の子たちは派手な声を上げて喜んだ。一球一球サーブしていると、バレー

ボールをやめて一年余りにしかならないのに、浩一は自分がずいぶん歳をとつてしまつたような気がした。高校時代のことがひどく昔のことのように思えてならなかつた。

夕方マンションに帰ると、母は食事の用意をしていた。浩一は母が呼びにくるまで、自分の部屋でスイングジャズを聞いていた。

夕食は野菜スープにロールキャベツ、それにかにサラダだつた。浩一は黙つて食べていたが、母は叶子のことを話題にし、どこで知り合つたのかとか、どういう付合いなのか、向こうの両親には会つたのか、彼女のことをどう思つているのか、果ては、悪い遊びに引張り込むんじゃないよなどと言つた。浩一は食べながら生半可な返事ばかり繰返した。

「ちよつと聞いてるの」と母は浩一の腕を押えた。「お母さんがちゃんと尋ねているんだから、もつとまじめに答えなさい」

浩一は母の手を振りほどいた。

「おれが、どこのだれと、どういう付合いかたをしようと、そつちの知つたことじやないだろう」

「何てことを言うの。わたしはあんたの母親よ。母親が子供のことを心配して、どこがいけないの」

浩一は黙つて残りのスープを飲み、ロールキャベツを半分に割つて口に入れ、ゆっくりとかんだ。そしてかにサラダのかにだけ箸でつまんで食べた。

「ゆうべ一緒にホテルにいった男の人は一体誰だい。お客かい?」浩一は口からこぼれ落ちるような言い方をした。

「え? 何のこと?」

「ディスコからタクシーでホテルへいつただろう、中年のはげかかったおつさんと」

「何言つてるの。そんなこと人違ひよ、人違ひ」

しかし母は明らかに狼狽していた。

「あの時ちよどおれ、ディスコから出てくるところを見てたんだよね。

それでタクシーの後をバイクでつけたのさ」

母は黙つてしまつた。ざまあみろと浩一は胸の内でつぶやいた。しばらく

く無言の食事が続いた。

「今まで黙っていたのは悪かつたけど」と母が箸を置きながら言つた。
「お母さんね、今度再婚することにしたのよ」

「再婚？」

「そうよ。許してくれるでしょ」

頭の中がぎゅっと詰まつた感じになり、思うように言葉が出てこなかつた。

「おまえが大学へいつていたら、再婚話になんか耳を貸さなかつたんだけど、おまえももう社会人で一人前になつたことだし、お母さんの役目も一応果たしたと思ってね。おじいさんも許してくれると思うんだけど、どう思う？……相手の人は柴田さんといつて、小さな鉄工所の社長さんなのよ。七年前に奥さんをなくされて、男手ひとつで娘さんを育てられたのよ。その娘さんも去年の秋にお嫁にやつて……」

「無理しなくてもいいよ、そんな作り話をしなくつたつて。客と寝るのも商売のうちだろ。おれは別に気にしてないぜ」

「何てことを言うの、この子は」

母は椅子から立上がりろうとして足をすべらせ、再び椅子の上に尻もちをついた。浩一は笑つた。母は今度は椅子を後ろに倒して立ち、浩一のそばまでやつてくると、「この恥知らず」と言うなり、彼の頭を叩こうとした。浩一は母の手首をつかんで、立上がつた。「わたしをそんな女だと思つていたの」と母はもう一方の手で浩一の顔のあたりを叩いた。浩一は手でそれをお防いだ。

「息子にそんなことを言われるんなら、キヤバレーなんかに勤めるんじやなかつた」母は涙声になりながら、防いでいる浩一の手を何度も叩いた。

「おじいさんに申し訳ない、おじいさんに申し訳ない」と母は念佛のように繰返した。浩一は何だか馬鹿ばかしくなつて、母の手首を体ごと押すようにして放した。母はよろめいて倒れ、しばらく伏せていたが、ゆっくりと起きあがると自分の部屋に入つていつた。浩一は次第に腹が立つてきた。
「じいさん、じいさんとあんたはあがめたてるけど、じいさんはな、サインで犬のように逃げ回つたあげく、殺されたんだよ。ひよつとしたら鉄

砲の代わりに鉄を持つて死んだのかもしないぜ。籠城のための食糧生産部隊というのがあったからな。それとも竹槍一本で突撃して、ふつ飛びされたかだ。どっちにしても、あがめたてるほどの大した死に様じやないことは確かだよ」

浩一はドア越しに叫んで、幾分すつきりした気持になつた。その夜母とは一度も顔を合わさなかつた。

翌朝ジョギングスタイルに着替えて居間にいつたが、母はまだ起きていなかつた。流し台の中には、きのうの汚れた食器や調理器具が放り込んであつた。浩一は立つたままトーストと牛乳の朝食をすますと、早目にマンションを出た。いつもより速度を上げて走つた。叶子との合流地点が見えてくると全力で走り、その場所に着くと腰に両手をついて呼吸を整えた。叶子はなかなか姿を見せなかつた。浩一は柔軟体操や逆立ちをして時間をつぶしたが、これ以上待てば遅刻するという時刻になつても叶子は現れなかつた。今まで雨の日を除いて叶子の休んだ日はなかつた。風邪でもひいたのかなと思いながら、浩一は会社に向かつた。

次の日もその次の日も叶子は現れなかつた。

木曜日になつて浩一は叶子の家に電話をかけることにした。彼女から電話番号を教えてもらつていないので、かけるのはまずいかなという気がしたが、この際仕方がなかつた。電話帳で調べて、受話器を取つた。出てきたのはお手伝いのようだつた。

「叶子さん、いらっしゃいますか」

「お嬢さまは、ただいまご旅行中です」

浩一は驚いた。

「いつから?」

「この前の日曜にご出発なさいました」

「どこへ」

「ヨーロッパでございます」

「それで、いつごろ帰つてくるんですか」

「さあ、存じあげておりません」

「おれ、新藤っていうんだけど、何か言づけなかつたですか」

「おれ、新藤っていうんだけど、何か言づけなかつたですか」

「聞いておりません」

電話を切つても、浩一は狐につままれたような気持だつた。土曜日に会つたときも、そんなことは一言も言わなかつたのだ。浩一はどうもおかしいと感じ始めた。旅行中というのは嘘ではないかという気がしてきた。サイパン戦の本を返すという名目で、叶子の屋敷に行くことにした。本の間には紙切れをはさんだ。そこにはダンスマラソンに備えての注意事項をいろいろと書いた。前の晩はできるだけ早く寝ること、当日もできれば学校を休んで三時ごろまで寝ていたほうがいい、食事はボリュームのあるやつを十分とること、靴はいつものはき慣れたやつをはくこと、服はゆつたりとして動きやすいものにすること。その他浩一は思いつく限りの注意をこまごまと書いた。そして最後に、電話するようにと書いて番号を記した。

バイクで屋敷の近くまで行き、そこから歩いて門の前に立つた。インターほんの釦を押すと、モニターカメラがこちらに首を振るのがわかつた。「どちらさままでございますか」インターほんから女の声が聞こえてきた。「藤井と申しますが」と浩一は嘘をついた。「叶子さんにお借りした本を返しに来たんですが

浩一はモニターカメラに向かつて、本を振つてみせた。

「藤井さまとおつしやいますと、失礼ですがお嬢さまとはどういうお知合いでいらっしゃいますか」

「……テニスクラブでときどき一緒にプレーをすることがありまして」「ああ、テニスのお友達でいらっしゃいますか。これはどうも失礼いたしました。ただいま参りますので、しばらくお待ち下さい」

浩一は自分の服装を点検した。紺のブレザーにグレーのズボン、そしてスリップオンの皮靴。リーゼントのヘヤースタイルもやめて、七三に分けてきたし、ちよつと見には金持のお友達に見えるだろう。

横の通用門が開いて、五十くらいの女の人が顔を見せた。浩一は本を渡し、ちよつと思いついて「叶子さん、ここしばらくクラブのほうにはお見えになりませんね」と言つてみた

「ちよつと事情がございまして。来週になればテニスもされると思ひます

ので

「叶子さん、いらっしゃいますか」

「あいにくただいま外出中でございまして、お預かりしました本は、お帰りになりましたら確かに渡します」

浩一は深々とお辞儀をして、門を離れた。

マンションに帰つて、用意されていた夕食をとつていたとき、電話が鳴つた。早速叶子がかけてきたと彼は思った。

「もしもし新藤ですが」と浩一がいうと、相手は一呼吸間を置いてから「やつぱり新藤さん、それとも藤井さんかしら」と答えた。浩一はどきりとした。

「ですか」

「これは申し遅れました。わたくし、柳原叶子の母でございます。新藤さんは叶子が大変お世話になりました、お礼の言葉もございませんわ。それに何ですか、この度はダンスのマラソンとかにお誘いいただきまして、ありがとうございます。ですが、娘は行きたくないと申しておりますし、たとえ行きたいと申しましても、母であるわたくしが許しません。ですから……」

「本当に娘さんは行きたくないと言つてるんですか」

「ええ、そうですよ」

「叶子さんに代わつてもらえますか」

「娘はただいま出かけております」

「それじやあ帰つてこられたら、こつちのほうへ電話してくれるように伝えて下さい。本人の口から直接聞かなきや信用できないものね」

「あなた、わたしの話を聞いてないの。娘が何と言おうと、わたくしが許さないと言つてるでしょ」

「おたくね、娘さんを縛りつけて自分の思い通りにしようとしてるらしいけど、そんなことをしたら死んでしまうよ。わかつてんの」

向こうで息を飲む気配のするのがわかつた。

「何を言つてるんですか。叶子はうちの大事な跡取り娘ですよ。あなたみたいな悪い虫がつかないように注意するのが、親の義務つてものでしよう。

いいですか、今後は金輪際娘に近づかないようにして下さい。もしも近づいたら承知しませんからね」

「わかつた、わかりましたよ。では、さようなら」

切れた受話器に向かつて、バーかと毒づいた。本に紙切れをはさんだのはまづかつたなと思ったが、これで叶子がダンスマラソンに来られないことがはつきりしたんだから、むしろよかつたんじやないかと浩一は自分を慰めた。

浩一はダンスマラソンを見にいく気はなかつたが、土曜日になると何だか体がむずむずしてきた。三時過ぎに会社から帰つてくると、悟たちの応援に行くという口実を思いついて、出かけることにした。

浩一が服を着替えていると、化粧中の母が顔をのぞかせた。

「また、ダンス？」

「ああ」

「あしたは、家にいるの？」

「どうして」

「いるかつて、きいてるのよ」

「今のところ、別に何もないけど」

「だつたら、あした連れてくるわね」

「何のこと」

「柴田さんを連れてくるつて言つてるのよ」

「おれ、関係ないよ」

「そんなことないでしょ。おまえの母親が結婚する相手よ。関係ないことないでしょ」

「そつちがオッケーなら、おれは文句ないよ」

「柴田さんがおまえに会いたいとおつしやつてるのよ。ごちやごちや言わずに会つたらどうなの」

「わかつた、わかつた。ハゲでもデブでも連れていらっしゃい。会いますよ」

「あした十二時ですよ。昼ごはんを一緒に食べますからね。わかつた？」

母は何度も念を押してから、部屋を出でいった。

五時前に『ジミーの店』に着いた。すでに五十人くらいが並んでいた。五時から受付け開始で、六時スタートだった。悟と由美は中ほどに並んでいた。

「おまえのパートナーはまだ来ないのか」と悟が言った。

「彼女は肺炎で入院。したがつておれは棄権なのさ」

「ランニングをしすぎて、本番前にダウンつていうわけね」と由美が笑つた。

腹ごしらえのため向かいのハンバーガーショップでチーズバーガーを食べていると、悟が走ってきた。

「おまえの彼女、病院から脱け出してきたぞ」笑いながら悟が言った。

「まさか」

ハンバーガーを手に持つて走つていくと、由美の横に叶子がいた。白いトレーニングウェアを着ている。浩一は叶子の腕を取つて、ビルのかげまで引張つていった。

「どうしたんだ」

「テニス部の合宿というのがばれて、本当のことを話したら、見張りつきになつちやつたのよ。どこへ行くのもその男と一緒に。おかげで電話もできなかつたのよ」

「それで大丈夫なのか」

「ええ。ジョギングの途中でタクシーに飛乗つて、まいてきたから」

「じゃあ、オッケーなんだな」

「もちろん」

やつたねと浩一は叫んだ。急にうれしくなってきた。叶子のトレーニングウェア姿はいくらマラソンだからといつても合わないので、近くのなるべく安そうなブティックでフレアースカートとブラウスを買った。叶子はほとんどお金を持っていなかつたから、浩一が出した。そしてスタミナをつけるため、レストランでステーキを食べた。時間がなかつたので急いで詰め込み、ディスコに戻つた。いつもの三倍の料金を払い、九十五番のゼッケンをもらつた。参加料の中には、食べ放題のサンドイッチの値段も含まれていた。

フロアリーは肩からゼッケンをかけた男女でごった返していた。浩一は悟たちを探したが、見つからなかつた。六時になつて、スピーカーから声が聞こえてきたが、会場がざわめいているため何を言つてゐるのかよくわからぬ。そのうちみんなが回りの人間に静かにするよう言ひ出しそうやくはつきりと聞こえるようになつた。

スピーカーはルールの説明をしてゐるのだった。特に強調してゐるのは、一時間に一回ある五分間の休憩以外どんなことがあつても休むことは許されないということだつた。違反者はただちに失格とスピーカーは告げていった。

ベルの合図とともに音楽が流れ出し、二百人を越える人間がいつせいに揺れ始めた。浩一も叶子の腰に手を回して踊り始めた。人がいっぱいなので自然とステップが小さくなつた。

「本を返してもらつたかい？」と浩一は話しかけた。

「何の本」

「サイパンのやつさ」

「いいえ」

そこで浩一は一昨日のあらましを話して聞かせた。

「きみのおふくろさんから電話をもらつたときは、びっくりしたぜ。今後娘に近づいたら承知しません、て言われちゃつたからな」

「ごめんなさいね。母もけつして悪い人じやないのよ。いい人なんだけど、ただ自分の世界を守ろうとだけするから、おかしくなつてしまふのね」

「守れる世界があるだけ立派だよ」

「じゃあ、あなたにはないの？」

「ないね」

「あら、簡単に言うのね」

イン・ザ・ムード、バードランドの子守歌、夕陽のサファリといったスタンダードナンバーで始まり、二十曲ほどぶつ続けに踊ると休憩になつた。休憩といつても、フロアリーの回りにいつもあるテーブルやスツールは取扱われているので、床に腰をおろすしかない。

始めのうちは勢いよく踊つている組がたくさんあつたが、十二時を過ぎ

るころになると、いなくなつた。踊つている組も半分以上減り、三十組くらいになつた。休憩時間に浩一たちは横になつてサンドイッチを食べた。

三時を回つたころ、急に疲れが襲つてきた。新学期が始まつてまだ間がないので、参考書や問題集の出荷が多く、浩一は倉庫を動き回つているのだ。出るとわかつていたら、仕事なんか休んだんだがと浩一は舌打ちをした。脚が棒のようになり、膝が落ちやすくなつた。叶子は頭を浩一の胸に預け、右手で肩にぶら下がつてゐる。三つ以上のステップの連続というのは、予想以上に厳しかつた。まだ十組ほど残つていたが、どの組も基本ステップの変形だけですませており、それは見た目には基本とほとんど変わらなかつた。浩一たちも同じ方法をとつた。

疲れてくると、トイレに行くときが一番失格になる危険が大きかつた。したくなると合図をして、トイレに近いところまで踊りながら移動した。そして休憩のベルが鳴ると同時に飛込むのだ。でないと順番を待つてゐるうちに、開始のベルが鳴つてしまふ恐れがあつた。

悟と由美は五時過ぎに脱落した。それを見て、浩一はいくらか気力を回復した。やつらがあそこまで頑張つたんだから、トレーニングをしたこつちがそれ以上いかなくては笑われるぞと思ったのだ。ただ心配なのは叶子の体力だつた。ステップが足を引きずるような感じになつてゐる。

「大丈夫か」と叶子にささやいた。「どうしてもダメだつたら、やめてもいいんだぜ。無理するなよ」

叶子は顔を上げた。目の回りが黒くなつてゐる。

「まだまだ。これくらいのことで、ばてたんじや、生きていけないわ。わたし、やるわよ。絶対にサイパンに行くわ」

「サイパンか」

密林を逃げ回る祖父の姿が一瞬頭を通り過ぎた。

八時ごろには、残つてゐるのは三組になつた。浩一はジョギングパンツをはいた組が要注意だとにらんでいた。着ているものを軽くして臨んでいるということは、体調のほうも十分整えてきているに違ひなかつた。それに休憩時間に飲むものも、浩一たちのただの水とは違つて、彼等自身が用意してきたポットから何か飲んでいた。

三組になつてからは、膠着状態が続いた。浩一はもう一組のひよろ長い男とずんぐりむつくりの女が次に脱落すると踏んでいたが、やつらもこつちが落ちると考えているだらうと思うと、何だか意地でもやつらより先には降りたくなかった。

ほとんど惰性で体を動かしていた。休憩時間には床に寝て、目を閉じた。昼過ぎになつてようやく、ひよろ長組が脱落した。休憩のとき、浩一は横に寝ている叶子に「もうやめるか」と声をかけた。「まだいけるわ」と叶子は目を閉じながら答えた。

腕時計を見ると、十二時半だった。おふくろの再婚相手が来ているころだなと思い、これからは自分の世界を探さなくちやいけないとぼんやり考えた。

ベルが鳴つた。「さあ行くぞ」浩一は自分自身に声をかけて、立上がつた。